

今村 薫 著

砂漠に生きる女たち

—カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼—



どうぶつ社
2010年 246ページ
3000円+税

本書は、アフリカのカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民サンについて、著者の今村薫が1988年から1998年までにおこなった生態人類学的な研究の成果をまとめたものである。著者が調査をおこなった地域では、田中二郎(京都大学名誉教授)が1967年に調査を開始し、続いてさまざまな専門分野の日本人研究者による研究が数多くおこなわれてきた。そのなかで著者は、サンの女性による生業活動の行動学的な側面に注目しておこなった詳細な調査をもとに、サンの人びとの生業活動の中核をなす「すべてを分かち合うシステム」(=シェアリング・システム)の動態を見事に描きだした。それは、これまでの男性中心的な立場にたって描かれてきた狩猟採集民サンの平等主義をあらたにとらえなおすものであった。この点において著者は、狩猟採集民サンについての生態人類学的研究にあらたな見解をもたらしただけでなく、アフリカに暮らす人びとの生活世界を分析検討するうえで、女性の視点にたって生業活動を行動学的な側面から理解することの重要性を提起したといえる。

本書は4部9章で構成されている。「はじめに」でふれられているように、第1部から第2部、第3部へと読みすすめるにつれて、著者がフィールドで学んでいたのと同じように、サンの女性たちの採集や調理など目に見える活動から、彼女たちの儀礼や世界観など不可視の部分について理解をふかめていくことができる。

「第1部 自然資源の共有」は三つの章で構成されている(第1章:採集活動,第2章:協同と配分,第3章:同調行動の諸相)。ここではサンの女性たちが、ともに採集活動におもむき、採集したものをわかちあう姿が詳細なデータに基づいて描かれている。

「第2部 原野に生きる体験」は二つの章で構成されている(第4章:乾季の別れ,雨季の再開,第5章:エランドを踊った日—女性の一生)。第2部は、第1部とはうってかわり、乾いた大地に暮らすという経験を、季節の移り変わりや女性の人生における節目と、サンの女性たちの語りを手がかりにして理解することをこころみている。

「第3部 身体資源の共有」は三つの章で構成されている(第6章:通過儀礼,第7章:社会関係の軋轢と儀礼,第8章:ザークと民族生殖理論)。第3部は、フィールドワーク中に著者が遭遇した事例をもとに、サンの人びとの通過儀礼や彼/彼女らの消極的な感情(嫉妬や妬み)への対処の仕方、さらには生命の誕生にかかわ

る生殖理論について検討している。

読者は「第4部 自然から制度へ」を読んで、サンという人びとが平等主義的な狩猟採集社会に生きているというよりも、自由闊達にして与え手も受け手もわかちあいを拒否(もしくは放棄)できるコミュニティのなかで生きていることを再確認するだろう。生態人類学的な研究では、生産から消費にいたる過程を理解しようとする際に、分配における互酬性や、物質の平準化を前提にして解釈する傾向があった。だが本書は、著者がフィールドで経験した、ものばかりではなく行為も共有されている場面のデータを淡々と示すことによって、定型化された解釈枠組みから逃れることに成功している。その点において、本書に掲載されているさまざまなデータには、これからフィールドワークをおこなう学生にとって、既存の解釈をくつがえすデータ収集のためのヒントがかくされているといえるだろう。残念ながら本書は、1998年以降にこの地域(カデ地区)に暮らすサンたちが経験したさまざまな変化についてはふれられていない(1998年以降の彼らの生活については2010年に出版された丸山淳子の著書を読むことをおすすめする)。だが、1998年以降にサンの人びとが直面しているさまざまな変化やそれへの対応は、言うまでもないが、これまでのサンの人びとが積みかさねてきた生活実践の文脈にそって生じていることである。その点において、本書があきらかにしたサンのシェアリング・システムは、私たちと同じ時代を生きるサンやアフリカの狩猟採集民が直面している社会的な変化を理解し、今後の変化の方向性を考察するうえで不可欠なものであろう。

(金子守恵/京都大学)